

[連載]

## 博士課程生活講座！ ～茂木さんに聞いてみよう～

第4回 先行研究の読み方（前編）

茂木俊伸

---

若手研究者から院生に送るエッセーです。ちょっと先輩の声に耳を傾けてみませんか？ 何か新しい世界が見えてくるはずです。

---

[企画]

## 読みやすい本

大学院生応援企画「ビブリオバトル」

(2016年10月2日開催) より

---

日本語／日本語教育研究会では、2016年10月2日（日）に第8回研究会のプログラムとしてビブリオバトルを行いました。テーマは「読みやすい本」。当日、取り上げられた作品は以下の通りです。

御厨貴『オーラル・ヒストリー』

荻坂満里子『ワーキングメモリー脳のメモ帳』

川平ひとし『中世和歌論』

秋田喜代美『読む心・書く心—文章の心理学入門』

西江雅之『新「ことば」の課外授業』

ビブリオバトルに来られなかった人のために、ここでは各登壇者に報告を書いてもらいました。お楽しみください。

総務委員 岩田一成・建石始

## 第4回 先行研究の読み方 (前編)

茂木俊伸 (熊本大学)

このエッセイでは、日本語学・日本語教育学分野の博士課程(博士後期課程)にいる人、または博士課程に進学しようと考えている人に向けて、若手(だと自分では思っている)大学教員が、自分の経験の中で「後輩たちの役に立ちそうなこと」について語ります。

### 1 はじめに

前回(第3回)は、大学院生としての時間の使い方のお話でした。その中で、研究活動におけるインプットとアウトプットについて触れたのですが、今回(と次回)はインプットの側面、主に「先行研究」と呼ばれる文献を読む方法について詳しく見ていきます。

ゼミや研究会で発表すると、よく「先行研究とどう違うの?」と言われる。しかし、何のために、いつ、どれくらい、どうやって先行研究を読むのかについて、詳しく指導されることはあまりないのではないのでしょうか。先行研究の扱い方は、個人の経験に依存しがちで一般的な技術として捉えられにくい、いわゆる暗黙知の領域のものと考えられてきたように思われます。

しかし、これまで学会発表を聞いてきた印象や論文査読の経験から言うと、先行研究の読み方が“怪しい”層が一定数いると感じます。例えば、学部段階でよく言われる「個別の論文の不十分な点を探す」という読み方は、間違いではありませんが、それだけで十分でもありません。先行研究の読み方がインプットの質に関わり、最終的には発表や論文などのアウト

プットにも影響するのであれば、読み方を意識する方法を考えてもいいのかな、と思うのです。

## 2 先行研究を読むことの意味

では、なぜ先行研究を読むのでしょうか。「巨人の肩の上に立つ (Stand on the shoulders of giants)」という有名な表現で説明されるように、それは、「研究」という行為自体が、個人で行うものであっても、個人の中で完結するものではないからです。研究は新しいことを提示するものですが、自分にとって“新しい”思い付きや意見を出せばいいわけではなく、同じ研究領域の「みんな」にとっての新しさがある内容でなくてはなりません。先人の積み重ねてきた土台の上に、新たに一つの石を置くのがあなたの仕事であるならば、その石の価値を示す責任は、あなたにあります。研究指導において、研究の「意義」や「位置づけ」という表現がよく使われるのは、このためです。

## 3 先行研究を読むタイミング

先行研究はいつ読むのでしょうか。日本語教育学分野の研究支援本である本田ほか (2014) や細川 (2015)、あるいは社会学分野の平岡ほか (2013) (この本は、先行研究の扱い方を解説した第I部「知の見取り図を描く」に実に7つの章を割いています) を見ると、いくつかのタイミングがあることが分かります。おおざっぱに言えば、次のようにまとめられるでしょう。

- ① 分からない状態で読む → テーマや方法を明確化するために読む
- ② (ある程度) 分かった状態で読む → 立ち位置を明確化するために読む

①は、おおよそのイメージはあるけれども、まだ何がやりたいのか、何が研究になるのかが明確ではない段階です。詳しくない分野について新たな知識を得るといった側面もありますが、先行研究を使ってアイデアをよ

り具体化し、消化していくことで、研究の方向性を見定めることが目標と言えます。

次の②は、ある程度分析を進め、その結果の意味を考える段階です。先行研究の助けを借りながら、自分が明らかにしたことの学問的な意味を他者に明確に説明できるように、論点を整理し、研究の位置づけを図ります。

そもそも、研究活動は、「インプット（集める、読む、調べる）→手と頭を動かす（整理する、考える）→アウトプット（書く）→手と頭を動かす→インプット→……」というサイクルの繰り返しですから、先行研究を読むのは何回目のサイクルでもかまわないわけです。しかし、研究の初期段階（①）か進んだ段階（②）かで、理解度も読み方も変わります。同じ論文でも、気になったものは意識的に再読してみましょう。（なお、さらに後の論文の執筆段階で、先行研究の記述を正確に引用して批評するためにもう一度読む必要があるのですが、ここでは省略します。）

#### 4 先行研究の分類と読み方

「先行研究を読む」という場合、ターゲットとなる文献は、自分のテーマと研究方法との重なり具合によって、次の表のように分類できます。

表 先行研究の分類

方法 \ テーマ	同じ	違う
同じ	A	C
違う	B	D

通常、「先行研究」として強く意識するのは、Aのエリアの文献です。自分の研究に直接関わる場所ですから、ウェブで少し調べて「ない」と片付けるのではなく、網羅的に探して読むことが望まれます。一方、ここにたくさん「ある」と「もうダメだ……」と落ち込む人がいますが、これまで分かっていることを踏まえて自分が貢献できることを探せばいいので

すから、不利とも言い切れません。また、この貢献がはっきり示せないのであれば、そのテーマが本当の意味で自分のものになっていない、ということも分かります。

研究の効率性だけを考えるなら、このAの論文だけを読んでおけばいいことになりますが、残りの3つのエリアにも意味はあります。むしろ、こちらの方が、研究の視野を広げるためには重要と言えるでしょう。

まず、同じテーマを異なる方法論から論じているBのエリアの文献は、自分と同じ（あるいは類似の）現象が異なる視点からどのように分析され、どのような問題を提起するものとされているかを見ることができますから、特に、自分のテーマがどのような意味や可能性を持つのかを考えるヒントになります。

一方、自分に近いスタンスで異なる内容を扱っているCのエリアの文献は、あまり「先行研究」として意識されることはないかもしれません。しかし「違う現象でも共有できる問題意識はないか」という読み方をすれば、自分のテーマとの類似性を見出すことができる可能性があります。このとき、今取り組んでいるテーマが、より大きな問題の一部として捉え直されるかもしれません。

最後のDのエリアの文献は、どちらかと言えば「勉強」の一環として読むことが多いものです。乱読によって自分の研究が進まなくなるのは本末転倒ですが、前回触れたとおり、院生時代に読んだものが後の大きな貯金になることは間違いありませんし、自分の研究の、特に当たり前だと思っていたスタンスの部分を相対化する材料にもなります。Cにも関わりますが、理論的な枠組みに興味のある人なら、個別的な現象の分析の詳細よりも、「なぜ、何のためにそう考えるか」というその理論の考え方をしっかり勉強してほしいところです。

なお、研究のテーマ自体、広げたり絞ったりしながら徐々に明確化していくものですから、どの先行研究がより重要であるのかも、研究の進展に伴って変わります。むしろ、Aのエリアが絞り込まれるくらい先行研究との関係がはっきりすれば、先の①の段階は脱出できていると考えてもいいかもしれません。

## 5 おわりに

佐藤 (2016: 23) が「過去の論文はよく知っているけど何一つ建設的なことが出てこない評論家タイプ」を批判するように、先行研究は読めばいいというものではありません。教育的配慮もあって、「先行研究を読みすぎると自分の研究ができなくなるから、そんなに読まなくてもよい」と指導されることもあるかもしれません。しかし、博士論文を一つのストーリーとしてまとめるためには、適切な時期に適切な目的を持って、自分のフィールドの見取り図ができる程度の広さ・深さで、先行研究を読んでおくことが必要でしょう。

### 参考文献

- 佐藤雅昭 (2016) 『なぜあなたの研究は進まないのか？一理由がわかれば見えてくる、研究を生き抜くための処方箋』メディカルレビュー社
- 平岡公一・武川正吾・山田昌弘・黒田浩一郎 (監修) (2013) 『研究道—学的探求の道案内』東信堂
- 細川英雄 (2015) 『増補改訂 研究計画書デザイン—大学院入試から修士論文完成まで』東京図書
- 本田弘之・岩田一成・義永美央子・渡部倫子 (2014) 『日本語教育学の歩き方—初学者のための研究ガイド』大阪大学出版会